

■モーツァルト／協奏交響曲 変木長調 K.297b (Anh.C14.01)

18世紀半ばは音楽のスタイルが大きく変動した時期にあたる。ちょうどバロック時代の最後の巨匠であるJ.S.バッハが1750年に没し、モーツァルト(1756-1791)がその6年後に生まれている。たとえば、バッハの「管弦楽組曲」で聴くことのできた複数の独奏楽器の活躍する協奏曲のスタイルも、ヴィヴァルディによる独奏協奏曲のジャンルでの成果によって大幅に後退し、古典派の時代からロマン派の時代にかけてはソリストが華麗な技巧を披露する、独奏協奏曲が主流になっていく。

しかし、じつは複数の独奏楽器群をもつ協奏曲を、モーツァルトも書いている。「サンフオーニー・コンセルタント(協奏交響曲)」と呼ばれるジャンルで、モーツァルトも数曲、手がけた(完全な形で残っているのは変木長調のこの曲のみ)。しかし、バロック時代の形式をそのまま、うけついただけではない。じつは当時フランスで、「協奏交響曲」の作曲が流行っていて、ちょうど旅の途中、パリに立ち寄ったモーツァルトは、いつものとおり、この目新しい形式に魅力を感じて、作曲を試みたのである。

ところで、モーツァルトの変木長調の協奏交響曲というと、K.364のヴァイオリンとヴィオラを独奏楽器とする作品が有名だ。今回、演奏されるK.297bの協奏交響曲も変木長調なのだが、じつはモーツァルトの真作か偽作か、議論を呼んできた作品である。1778年にパリでフルート、オーボエ、ファゴット、ホルンのために協奏交響曲が書かれたことは確かだが、その自筆譜は失われ、20世紀になってこの楽譜が発見され、その編曲版と考えられた。しかし、近年では大幅に他人が手を入れた楽譜だというのが定説になっている。

3楽章構成で、全編に渡って喜ばしい雰囲気満ちている。導入的な第1主題で始まる第1楽章アレグロは協奏風ソナタ形式。ディヴェルティメント的な性格をもつ。第2楽章アダージョもソナタ形式。弦楽器のユニゾンで始まる導入部に続き、ファゴットから順に独奏楽器が重ねられていく第1主題となる。短調で始まる展開部に続いて、定型的な再現部となる。第3楽章アンダンティーノ・コン・ヴァリアツィオーネは主題と10の変奏からなる。きびきびとした明るい主題が楽器どうしの対話など、さまざまな組み合わせで独奏楽器の魅力を引き出していく。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：オーボエ2、ホルン2、弦五部、独奏オーボエ、独奏クラリネット、独奏ファゴット、独奏ホルン ※スコア上の表記